祖母の涙

中原区支部　坂本　松男（甥）

戦没者　坂本　良三

戦没地　ビルマ

見たことのない叔父の顔を私はしみじみと見つめている。

絵の好きだった私の父が描いた良三叔父さんの似顔絵が仏壇の上に掛けてある。今まで気にも止めなかった叔父の顔が丸い眼鏡の中から微笑んで実に好青年に描かれている。坂本良三　二十六才　昭和十九年七月三日ビルマにて戦死。

どのように戦い、どのように死んでいったのか今は知る術もありませんが、酷暑の中で想像を絶することの連続だったと思われる。六人兄弟の三男坊として生まれ、生きていれば九十二才、どんな人生を送ったのでしょうか…。その横に厳つい顔の祖父と、おっとりした祖母の似顔絵が並べて掛けてある。祖母は私を可愛がり、楽しみだったラジオの浪曲の声が私の子守唄だったと記憶している。その祖母が叔父良三の出征の時、涙ひとつ見せずに日の丸の旗を振って戦地に送り出したと父から聞いたことを思い出した。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

夏の暑い日でした。私が小学校一年か二年生の夏休み、父と母も出掛けていて、祖母と二人でいたある日、外で遊んでいた私は窓から薄暗い部屋を覗き込むと、祖母がポツンと座っていた。後ろ姿である。寂しさを感じた私は部屋に入り「おばあちゃん」と声をかけて前に廻った時、おばあちゃんは泣いていたのだ。なにか写真のようなものを見ながら、あの優しくも強いおばあちゃんが泣いていたのです。私は驚いて、見てはいけないものを見たような、何が何だか解らない様な気持ちで外に飛び出してしまった。玄関の両脇に一本づつ植えられている立葵の赤い花と、真っ黄色の向日葵がギラギラと私の行動を見ていた。

そんな光景を夢のように思い出しながら、祖母が見ていたあの写真は良三叔父さんに間違いないと今思ったのです。そして大事な秘密を守ることのように、既に亡くなっている父にも、痴呆症になってしまった母にも、今まで誰にも話さずにいたのです。何故か話してはならないような、守ってやらなければならないと子供ごころに思ったのかもしれません。

そんな出来事を今まですっかり忘れていたのですが、お彼岸が近づき仏壇の掃除をしている時にふっと思い出したことです。

平成二十二年の夏は異常に暑く、九月も中だというのに遠くで蝉が鳴いているようです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会